

復本一郎著

『俳句とエロス』

(講談社現代新書・2005年・720円)

立教大学社会学部教授 阿部 珠理

俳句は、日本人にとって近くて遠い文芸ではないだろうか。俳句の五七五のリズムが、私たちの言語感覚に浸透しているかのように思えるのは、近さの現れであろう。標語などつい五七を刻んで「気をつける車は急にはとまれない」とか「赤信号みんなで渡ればこわくない」ということになる。小学校や中学校で生徒に俳句を作らせると、日常の情景を素直な感情にまかせて、それこそ泉が沸き出すごとく、句が溢れ出すらしい。

しかし、情景や思いを5・7に当てはめるだけでは俳句にはならない。俳句は世界で一番短い定型詩であり、それが「詩」という文芸であるためには、高度な言葉の結晶化が必要である。誰にでも出来ながら、なかなかいい句はできない—これが俳句の「遠さ」の所以であろう。

言葉の結晶化だけではない。俳句はその短い17字の中に思想と美を込めて成り立っている。「わび」「さび」がその思想的核であり、花鳥風月がその美の根源である。「静かさや岩にしみいる蝉の声」という日本人であるならほとんどの人が慣れ親しんだ芭蕉の俳句がある。この句に接した時、私たちは表現された光景と音だけではなく、そこには「沈黙」と宇宙の広がりや寂寥感、あるいは禅的な悟性を感じることを期待されているかもしれない。

私はかつてアメリカの大学院在学中、

Japanese Literature in Translationという科目をとったことがある。社会学専門の私が単位に関係のない授業をとったのは、文学に浸って頭の骨休めをしたかったからだが、この授業で接した俳句の英訳には、少なからず驚かされた思い出がある。

The cicada's voice

Sink in the rock

Breaking the silence

件の芭蕉句だが、そこにはオリジナルと似ても似つかない世界があり、そのことよって私は俳句の深い「哲学」に思いをいたした。小説とも和歌ともことなり、俳句が英訳に馴染みにくいという指摘にも、一部頷けた。だが、こういう高尚さにばかり目を奪われていると、それこそ俳句がわれわれからさらに遠いものになってしまう。

本書の著者は、いち早く俳句を「今日を生きる私たちの日常生活を自由自在に詠むことが可能な文芸」とであると位置づけている。さらには私たちのその日常生活における重要関心事に異性への関心とその関わり、そこに立ちのぼる美、つまりエロティシズムがある。著者によれば、エロティシズムは「人を引き付ける性的魅力」として日本語の「色気」に近いものだが、恋愛、情事としての「色」とは区別されるべきものであり、あくまで「あえかなる」ものである。

本書はあまりにわび、さびと結びついた

俳句という文芸を、「エロティシズム」というあらたな視点から読み直す画期的な著作である。子規以降の俳句作品を対象に、そこに形象化されているエロティシズムを検証する。そして著者の嗜好する「あやかなる」エロティシズムを視座に選ばれた約170句をもって、俳句の世界に「エロティシズム俳句」という分野を切り開く新たな試みである。

もちろん今までにも、性や恋愛にまつわる句やそのジャンル、それらを集めた句集がまったくなかったわけではない。そのことも著者は丁寧に教えてくれる。たとえば川柳には性を謳歌する「破礼句」がある。これは性を読んで笑いを誘うものであり、これに類する俳句に著者は艶笑俳句という名称をあてている。

明治になってからは、秋田の俳人安藤和風が『恋愛俳句集』というアンソロジーを編んだ。そのことによって俳句は隠者に詠まれる山川草木を愛でる文芸ではなく、和歌や小説に遜色なく恋愛を詠める文芸であることを和風は訴えた。大正になってからは、熊谷無漏が尾崎紅葉、巖谷小波らの秋声会のアンソロジー『艶色句選』をまとめ、男女間の情味、情調がいかに取り扱われ、形象化され俳句になるかを示した。

これら永らく閑却されていた、エロティシズムの水脈を掘り起こしながら、著者は、それらとは一線を画するエロティシズム俳句を、実に分かりやすく例証してくれる。例えば、エロティシズム俳句の作者とは想像しにくい漱石の次の三句である。

「忘れしか知らぬ顔して畑打つ」

「泣かれては断りかねて春の雨」

「合の宿お白い臭き衾かな」

最初の句は特定の対象を念頭においた恋愛俳句であり、二番目は男女間の情味の機微を詠む艶色俳句となる。そして著者がエ

ロティシズム俳句として注目するのが、第三句である。安宿に泊って布団にはいったところ、多分昨夜の客であったろう女の白粉の移り香がかすかにした。作者は女の顔も知らないが、匂いに触発されて豊かな想像の世界が艶かしく広がる。これこそ復本氏のいう「あやかなるエロティシズム」である。漱石の句は具体から抽象へ進化し、抽象度を増すごとにエロティシズムが深化する。このことによって著者は、色、恋とは異なるエロティシズムの本質を抉るのである。

復本氏は草城研究の第一人者としてすでに『日野草城—俳句を変えた男』（角川書店）を著わされているが、本書でもエロティシズム俳句の開拓者として草城を位置づけている。

「春の灯や女は持たぬのどぼとけ」や「矯羞の団扇を洩れて蛾眉二つ」など、想像するだけでぞくぞくする色気である。著者が選ぶこれらのエロティシズム俳句は「性の営みそのものを読むのではなく、性の営みへの憧憬を読む、より美的なもの」なのである。これらの句を何度読みかえしても、鮮度は落ちない。なぜならそこにある色気は美に支えられているゆえ、一過性の催淫性-ポルノグラフィとは明らかに異なるからだ。

本書における復本氏の功績は、私たちの生の営みであるエロティシズムの本質を明らかにしながら、俳句をという文芸を私たちから、遠くても近いものにしてくれたことだと思う。

選ばれた句は「私の内なるエロスの反映」とおっしゃるが、耳、唇、眉、櫛、足袋、帯などのパーツ、小道具ごとのエロティシズム俳句の例示など親切に日本人の美意識の所在も教えられるし、秋の夜長には最適の艶ある一書である。